転生します

カイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生します

【Ｎコード】
Ｎ８０１５Ｌ

【作者名】
カイチ

【あらすじ】
一応は今の現状に満足していた主人公、
だが神の事故により死んでしまった
そんな主人公がチートな能力と共に頑張って行く
お話
※処女作です駄文ですそれでもいいならどうぞ

プロローグ1（前書き）

カイチです
処女作ですけど頑張ります
それでいいのなら次をどうぞ

プロローグ1

「んじゃな～」

「あぁまた明日～」
どうも今友達とカラオケに行った帰りです最高だよね友達とカラオケに行ったりボーリングしたり
そう男友達と・・あれなんだろ目から汗が流れてくる（／｜・、）

まあでも本当に俺はこんな生活
で満足してるのかもしらない
うん多分してるんだと思う

ん？あれなんだろ空からなんか
降って・・・・・・

俺はそこで意識を失った

「あ・・あの～」なんだ急に声が聞こえて「すみませんあの起きてください」あ？

「ん？」
目を開けると一面真っ白な世界と幼女がいた

プロローグ2（前書き）

2話めです

プロローグ2

「は？」
誰だってこんか感じのリアクションをとってしまうだろ
何たって一面真っ白な部屋と幼女がいれば

「あの喋ってもいいですか？」
幼女が喋りかけてきた

「ん？あぁごめんな急にこんなところいたもんで、ところで何で俺こんなとこいんの？」

「え～それは実はあなた死んじゃいました」

「マジで？」

「マジです」

「そうか、俺死んじゃったのか原因は？事故？毒殺？デスノート？」

「以外と落ち着いてるんですねまぁその方がいいんですが
原因ですが・・・男の子がそんな些細なこと気にしないでください
幸せは、いつだって過去にはないんです未来にあるんですだから原因なんてどうでもいいじゃないですか」

「言いこと言ってるみたいだけど明らかに怪しいよね？
怒らないから言ってみ？」

「そっそれでは、ほっ本当に怒らないでくださいね？」

「わかったから早く言ってみ」

「あの、Ｗｉｉで私が遊んでる最中にＷｉｉリモコンがＰＳ３に当たっちゃってそのＰＳ３があなたの頭にヒットしちゃいました」

「な・・なんつーことしてくれとんじゃー！！！！」

「ひゃう、怒らないって言ったじゃないですか！確かに怒るフラグ立ってましたけど、男の子ならそのフラグを避けるくらいしてもいいじゃないですか！！？」

「ＰＳ３も避けられない奴に何求めてんだよ！！って言うか逆切れかこの野郎！！」

「だって楽しかったんだもんＷｉｉスポーツ！！というかそんなこと言っていいんですか！？私神様ですよ！偉いんですよ！？」

「はっ何を言うかこの引きこもり幼女が！！」

「なっ！なんで貴方かそれを知ってるんですか！」

「だってこの部屋よ～く見たら角の方にゲームやら漫画やらの引きこもりグッズが大量に」

「何見てるんですか！？女の子の部屋を勝手に調べて、そんなの鬼畜の所業ですよ！！この変態鬼畜！！」

「んだとこの引きこもり幼女が！！」

２時間後

「ハァハァこんな言い争い意味ないです」

「ハァハァそうだな一時休戦と言うことで」

立ち直るまで３０分

「こほん、え～まあ今回はこちらが悪いので元の世界に返すことはできませんけど貴方を転生させてあげることにしました」

っとない胸を張りながら言ってきた・・・？

「元の世界には何で帰れないんだ？」

「貴方の死体がＰＳ３によってぐちゃぐちゃになってしまいまして」

「復元も無理っと」

「はい」

その声がやけに心に響いた

「は～最後にお別れ位したかったな～」

「・・・お詫びとはいきませんが好きな世界に行けるように私頑張っちゃいますよ！」

「マジで！じゃあチート能力とか容姿とかもおｋ？」

「ん～まぁ私が悪いわけですしおｋです」

続く

プロローグ2（後書き）

引っ張ってごめんなさい

プロローグ3（前書き）

次からなのはに行きます

プロローグ3

「さてそれではまずチート能力から決めて行きましょうか」

「そうだなじゃあまずリボーンの死ぬきの炎全属性使えるようにしてあとボンゴレリングとボックスくれ」

「初っ端からいいところいきますね～まぁ大丈夫ですどんとこいです」

「んで次がネギまの魔法使えるようにあとテイルズの技と魔法とｆａｔｅの『王の財宝』と『無限の剣制』と投影」

「大変ですけど頑張ります」

「最後に魔力と気の限界を無くしてくれ後剣の才能と銃の才能も」

「限界を無くす、ですか私はてっきり無限にしてくれとかを言うのかと」

「まあ最初っから最強じゃ～な～つまんないっしょ」

「十分チートですけどね」

「んじゃ～容姿は「ちょっと待ってください！！」ん？」

「私は是非ともテイルズのクラトスを所望します！！」

・・・・クラトス、好きなんだ

「却下」

「なんで、ですか！？」

「俺テイルズよりＦＦ派なんだよクラウドとかめちゃくちゃかっけ～じゃん」

「そっそんな理由で見捨てるのですか！？クラトス凄くカッコイイじゃないですか！！」

「とにかく容姿はクラウドで」

「いいと思ったのに」

幼女が隅っこでいじけだした

「まぁほっといて世界はどこにしよう」

とりあえず『ネギま』は駄目だな正義の魔法使いとかマジうぜーしじゃあ『テイルズオブシンフォニア』は、テイルズで唯一やったことあるけどクラトス出て来るし幼女をあまり喜ばしたくない（主に

気分）
そうなるとやっぱり
「おい幼女」
「なんですか良ければもう少しいじけていたいのですが」
「行く世界決まったぞ」
「へ～決まったんですかっでどこですか？」
「魔法少女リリカルなのは」
「そうですか、それじゃあ、そこのドアを開けてくださいドアを開けたら貴方の第二の人生が始まります」
「そうか、なあ幼女最後にお前の名前おしえてくんね？」
「残念ながら私に名前はないんですよだから幼女って言われてもノーリアクション何ですよ？」
「んじゃ～俺が決めていい？」
「はい、お願いします」
「ん～じゃあ『リュミエール』
でフランス話で『光』って意味だ」
「何故にフランス語？でも、いい名前です気に入りましたこれからそう名乗ります」

「あぁんじゃ、またな」

「！？・・ええ、また」

そう言って俺はそのドアをくぐった

Ｓｉｄｅリュミエール

「最後になんで『またな』何ですかこれでも神様なんですよ？

そう簡単に会える分けないのに」

「よ～しＷｉｉスポーツやろ」

1話　俺誕生、デバイスも出るよ

「（ん？あれなんだ喋れないぞ
）オギャ　オギャオギャ」

「お母さん、よかったですね元気な男の子ですよ」

「よかった、本当によかった」

へ～この人が俺の母親かすっげー美人さんだなぁなんか役得って感じだな、っていうか待てよ俺ってこれから最低でも2才になるまでオムツ変えられたりしなきゃならいんだよな
やだ母親が美人な分いやだ何だよその羞恥プレイ・・・・駄目だ耐えられないＡＴフィールド（心の壁）はるぞコノヤロー

「今日からよろしくね」

まぁいい人そいで何よりだ

３年後

時間を飛ばすなってそんな細かいこと気にするなよというより誰が俺の羞恥プレイの日々を見たいんだよって話しだよ
まぁそれより俺の名前が決まりました名前はレイン・ハートネットどこの黒猫だよっと思うだろうでもしかたないだろ作者がＢＬＡＣＫ　ＣＡＴ大好き何だよ
それで今分かってる事が此処が鳴海市だって事とパピー（父）は昔、

管理局に勤めてた事があるらしいそのおかげリンカーコアもあるでも俺無くても大丈夫だけどな（笑）
でもそのパピーは事故で死んじゃったらしい

レイン「まぁとりあえずの目標は、能力の確認だな」

レイン「んじゃ～まずは、リボーンから行きますか！」レイン「えぇ～と覚悟を炎に、覚悟を炎に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？
何で出ないんだよぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

３０分後

レイン「考えて見たら3才の子供に覚悟何てある分けないじゃないか、死ぬ気丸飲んで覚えていくか」

レイン「しかしこう言った話しが出来る相手が欲しいな・・・・よし！デバイスを作ろう！」

レイン「と言う訳で母さんデバイスの作り方を教えてください！」

一人じゃ無理がありました、しかたないじゃないかだって3才だもの！！

母さん「ん～でもまだレン（レイン省略）には、早いんじゃないのかな？」

レイン「必要何だ！！俺の未来のためにも！！」キリッ

母さん「そうね、わかりましたレンに私のすべてを叩き込んであげる！！」

ニヤリッ

レイン「ありがとう！母さん」

どこの親も子供の成長って言うのはうれしい見たいだ、親何てチョロイぜ

それから一ヶ月後

レイン「やっとできたぜこの俺様のデバイスが」

レイン「それでは、・・起動！！」

『・・問おう、貴方が私のマスターか？』

レイン「・・・・・・・・・・」

『あれ、ガン無視ですか！？こういったデータいれたのマスターですよね！？それなのに無視ですか！？恥ずかしかったのにマスターの為に言ったんですよそれなのに無視って酷くないですか！！？』

なんだこいつ、確かにそういったデータいれて置けばアドバイス貰えるかな？っと思ったけど

コイツ持っててもプラスになると思えん、作り方間違えたかな？

レイン「あ～まあいいやお前の名前は、レナだ」

『大丈夫ですよネーミングセンスが無くてもマスターはマスターですから』

レイン「何だよいい名前じゃんレナ」

『いえ、別にだだひぐらしのヒロインみたいな名前だなぁと』

レイン「なら一号って名前に『ごめんなさい！！』ならばよし」

『それでは、ＢＪの製作にかかりましょうマスターイメージしてください』

レイン「まぁやっぱりここはクラウドの服でしょ」

『・・・はい、マスターＢＪ出来ました』

レイン「ＢＪもできたしもう一度能力確認しますか」

1話　俺誕生、デバイスも出るよ（後書き）

次は、設定書きます

2話　ランポスは、群れで行動するらしいです（前書き）

やっぱり設定は9才になってから書きます

2話　ランポスは、群れで行動するらしいです

『マスターまずは、どの能力から行っときます？』

レイン「そうだなぁこの前リボーンで失敗したから今回こそは、成功したい、と言う事で【ｆａｔｅ】行ってみたいと思います！！」

『わぁ～パチパチパチ～』

レイン「すっごく馬鹿にされた気がしたんだけど（怒）」

『気にしない～気にしない』

やっぱり馬鹿にしてる

レイン「んじゃ【投影、開始】」　　トレースオン

レイン「・・・・・・」

『マスター何故【洞爺湖】を作るのですか？（ちょっと呆れてる）』

レイン「だ・・だってまた失敗したらやだもん！！」

『だからって何故に【洞爺湖】普通ここは、【干将・莫耶】とかその辺りいきましょうよ？白髪の侍になってどうするんですか？』

レイン「わぁ～たよもう一度やればいいんだろ【投影開始】」

５分後

レイン「ん～～～はっ！で・・・出来たぞレナ！！」

『えぇおめでとうございます・・っといいたい所では、ありますが【干将・莫耶】にどれだけ時間掛かってるんですか！！それと投影中何うなってるんですか！一種の病気かと思ったじゃ無ですか！！」

レイン「いやなんか気合い入れる時ってさ声出ちゃうんだよ」

『だからってヌォォォォォォとかブルァァァァァとかどこのバルバドスですか！本当に恐かったんですからね！！』

レイン「そっそんな声出して・・・・ないよ？」

『自分でも出してたかわからないんですか』

レイン「まっまぁとにかく投影のコツはわかったから今回みたいに時間かからないと思う」

『それでは、とりあえず【ｆａｔｅ】はＯＫですね」

レイン「あぁとりあえずなよし次は【ネギま】にします、んじゃあレナ軽く暴れても良さそうな星に転移してくれ」

『はい、わかりました』

レイン「いざ行かん無人世界！！」

この時の俺は、忘れていたまだ自分の魔力が余りないことに

とある無人世界

レイン「あ・・・・あのレナさん」

『はい？何でしょうか？』

レイン「体が動かないのですが」

『そりゃそうでしょ、だってマスターの魔力ここに来るだけで無くなりましたから』

レイン「えっ！マジでそんなに低いの！？」

『はい、マスターがあの幼女にたのんだのって魔力と気の限界を無くすですよね？』

レイン「うん」

『それからマスター魔力や気を使いましたか？』

レイン「いや、全然」

『でしょならマスターの魔力って一般の魔法使いより下なんですよ3才ですから』

レイン「マジでか～いつ元に戻る？」

『そうですね元々の魔力が少ないから少ししたら戻るでしょ』

レイン「そうかんじゃ気長にまつ・・・・・！！！？・・・あのレナさん今すぐ魔力が元に戻る方法無い？」

『何急に言って・・・・！！！？・・・・そっそうですねちょっと無理があるかな？』

レイン「じゃっじゃあ、あのランポスに似たモンスター達から逃げる方法とかない」

『魔力を使わない死ぬ気の炎とかどうですか？」

レイン「でっでもこの前失敗したし」

『今がその死ぬ気じゃないですか！！』

レイン「ちょっ声あげるな「キシャーー！！！」ほら、気いたじゃんか！！」

『マスター死んだフリです！！死ぬ気になれないならせめても死んだフリです！！」

レイン「熊にもつうようしないのに大丈夫かな？かな？」

『マスターそれ私の台詞！』

レイン「やべ来た」

ランポス「じーーーーーーーーー」

レイン「（やばいよめっちゃ見てくるよ）」

『・・・・・・・・』

レイン「（てめ～　何自分だけマジで死んだフリしてんだよランポスさんコイツ生きてますよ）」

『（マスター私生きてません機械です）』

レイン「（そうだった～～～！）」

ランポス「じーーー・・・」

レイン「や・やった成功した」

『ふ～ほんとあぶなかったですね』

ドスランポス「ギャア」

レイン、レナ「（ギャアーーーーーー！！！！）」

レイン「（何で大きくなって帰ってくるだよ！！）」

『違いますドスランポスですよ！』

レイン「（んなのわかってんだよ「ガシ」ん？あれ？・・・・・・
レナさん僕ドスランポスに捕まれたんだけど）」

『はい、そうですね』

レイン「（運ばれてるんだけど）」

『はい、・・・そうですね』

レイン「（とりあえず次回に続きます）」

続く

3話　行動は、計画的に

あらすじ
『マスターが【ネギま】の魔法を試そうと無人世界にきたはいいものの魔力が尽きてしまい倒れてる所をドスランポスに拾われて今現在自分巣だと思われる場所に向かっている最中であった』

レイン「（どうしよう何でこんなことになるんだよ、俺まだ原作キャラにすら会ってないのにマジでやだ）」

『（とにかくこの状況から逃げる手段を考えましょう）』

レイン「（と言っても武器になりそうな物といっても【洞爺湖】位しかないしな～）」

『あれ？【干将・莫耶】投影してましたよねどこにやったんですか？』

レイン「（転移する時置いて来ちゃった）」

『何で置いて来るんですか！？』

レイン「（仕方ないじゃんかだって3才だよスプーンより重たい物持ったこと無いんだもん！）」

『マスター本気で原作介入するつもりあるんですか！？やる気が感じられないんですけど！！』

レイン「（今度からちゃんと鍛えるからとりあえず今をどうにかしようよ）」

『は～そうですね、確か死ぬ気丸ありましたよねそれで何とかなりません？』

レイン「（あーあったねそんなのでもなんかあれ恐いんだよでっかいから）」

『子供ですか！』

レイン「（子供だよ！！それも３才）」

そんな話をしている内にドスランポスの巣とおもわれる洞窟に付いた

レイン「（やっやばいよどうしようレナ）」

『そんなのわかるはずないでしょう！！！』

ドスラン「シャーーーー！！」

すると急に俺を降ろしたあと、急にどこかえ行った

レイン「なんだ、急に走りだして？」

『まあ助かったってことでいいんじゃないですか？』

レイン「そうだなレナ転移出来るまでいつまでかかる？」

『そうですね３０分って所でしょうか』

レイン「そうか、じゃあ待つとするか」

すると俺は、辺りを見回してみた

レイン「ん？・・・お！レナ！レナ！」

『何ですか？マスター？』

レイン「あんな所に卵があるぞそれも特大の、ちょうど俺お腹減ってたんだよ『待ってください！！』なんだよ急？」

『おかしくないですか？』

レイン「何が？」

『例えばあの卵がドスランポスの物だとして大事な卵をがある場所に私を置いて行くと思いますか？』

レイン「まぁ俺が親ならそんな事しねぇけど」

『でしょ、それにあのドスランポス最後に鳴いてから私達を置いて行ったんですよ』

レイン「！！？つっつまり誰かに俺達を渡す為にここに置いたと」

『はっはい』

レイン「そっそして・・さっきから後ろに居るのが」

『おっ親かと』

その言葉と同情に後ろを向いた

リオレイア「・・・・・・・・・」

レイン・レナ「こ・・こんにちは」

リオレイア「ギャアーーーーーーーーー！！！！！！」

レイン・レナ「ギャアーーーーーー！！」

『マスター！走って！！とにかく走ってください！！！」

レイン「わかってるよ！そっそうだ武器、武器はないのか！！」

『あるじゃないですか【洞爺湖】が』

レイン「【洞爺湖】でどうするんだよ醤油でも出すか！？」

『違いますよ！！【洞爺湖】も一応投影して作った物なら爆発させられるんじゃないんですか！？」

レイン「おぉそうだったな」

俺は、リオレイアに向かって【洞爺湖】を投げてから

レイン「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）！！」

ドゴォォォォォォン！！！

リオレイア「ギャァァァァァ」

『よし、マスター魔力貯まりました何時でも転移できます！！』

レイン「貯まったんだったら早く転移しろ！！」

『分かりましたマスター』

地球（レイン宅）

レイン「・・・・・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

『・・マスター』

レイン「・・何？」

『行動は、計画的に』

レイン「・・・・・・うん」

4話　原作キャラに会ったよ！（サブだけど）

2年後

『また、時間を飛ばしましたねこの駄作者が』

レイン「誰に向かって言ってるんだよ」

『いえ別に言わなきゃいけない気が』

俺は、あのモンハン事件（2話～3話）があってから真面目に修行している

まぁあんな事があったら誰でも頑張ろうと思うだろ

レイン「んじゃぁ～とりあえず復習しますか」

そう言うと俺は、死ぬ気丸を飲んだ

『何で今死ぬ気丸飲めるのにあの時飲まなかったんですか』

レイン「坊やだからさ！」

『・・・・もういいですそれでは転移しますよ』

ちなみに、あの事件いらいあの無人世界は修行に使っている

無人世界

レイン「さて、今日何行っとく？」

『ランポス無双何てどうでしょう？』

レイン「よし！採用！！」

ランポスの群れ

ランポス「ギャアッギャア」

レイン「レナ、セットアップ」

『OK、マスター』

レイン「ランポス狩りじゃー！！！」

レイン「死ねや～！！」

ランポス「ギャー！」

レイン「角勇五郎兄さん～～！！」

『よっぺいですねわかります』

ランポス「ギャ〜！！」

レイン「一万年と二千年前から愛を込めて壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」

ランポス「ちょっマジやめ・・・・」

『！！？マスター今ランポス喋りましたよね！！』

レイン「今宵は、アレグロアジデート今宵は、アレグロア『マスター！！』『なんだよ人が気持ちよく【炉心】歌ってるのに」

『もう、とっくにランポス全滅してます』

レイン「あ・・本当だ（笑）」

『（笑）ですませないでくださいよ「角っ勇五」ちゃんと聞いてください！！』

レイン「冗談だって、冗談」

『は〜っでこれからどうします？』

レイン「ふっふふ実はもう決めているんですよ」

『へ〜（棒読み）』

レイン「なんだその感情の入ってない声は『私機械ですから』ん〜そんなんじゃなかった気がするんだだけどな？」

『細かいこと気にしないでください』

レイン「こほんっでは、改めてこのたび私お小遣いをもらいまして
そのお金で【翠屋】に行きたいと思います！！」

『お～やっと原作キャラに会うんですね』

レイン「おう、そろそろ会っておかないと此処がリリカルな世界で
あることを忘れてしまいそうだからな！」

『そうですね来る日も来る日モンスターモンスターじゃモンスター
ハンターになっちゃいますもんね』

レイン「うんもう青やら赤や緑とかでそろそろ女の子をはさみたい
もんな」

『その女の子もまさかモンスターとのあいだにはさまれるとは、思
わないでしょうね』

レイン「それでは、いざ【翠屋】え！！」

翠屋

カランッコロン

美由紀・桃子「いらっしゃいませ～」

あぁやっぱり原作キャラの声は、いいものだよね～

美由紀「どうしたの僕？一人できたの？」

レイン「あっはい『（高町さん、この人精神年齢おっさんですよ！）』（うっさい！）」

美由紀「それじゃあこの席でいいかな」

レイン「はい、ありがとございますあのついでに注文いいですか？」

美由紀「うん、いいよ」

レイン「じゃあコーヒーとシュウクリームをひとつずつ」

美由紀「じゃあ少し待っててね」

そう言うとすぐに厨房にきえていった

レイン「いや～しかし此処が翠屋かやっぱりいいところだね！」

『なにが「いいところだね！」ですか店員目当てできといて』

レイン「しっかしなのはがいないね？どこにいんだろ」

『たしかに、この店も桃子さんと美由紀さんの二人でやってるぽいですね？』

レイン「士郎さんとシスコンも居ないの？」

『・・みたいですね』

なのはは、ともかくシスコンや士郎さんまで居ないののはおかしい

桃子「おまたせしました」

レイン「あっありがとうございます」

桃子「失礼だけど、名前教えてくれないかしら？」

レイン「レイン・ハートネット５才です」

『（精神年齢は、３０こえてます）』（黙れ）

桃子「そう、実は家にも５才の娘がいてねちょっと前にお父さんが事故にあってね？私や美由紀っあ美由紀って言うのは、さっきの子でね二人とも仕事でいそがしくて娘にかまってあげられないのだから君が暇な時でいいの一緒にあそんでくれない？」

レイン「（・・・・・・・忘れてたーーーー！！！そうだ士郎さん事故にあったんだった！だからいないんだよ・・まてよこれをつかえばなのはに簡単にフラグが立つじゃんか）」

桃子「・・あのレイン君？」

レイン「はっ・・わかりました！！その役目きっと成し遂げてみせ

ましょう！」

Ｓｉｄｅ桃子

私は、夫が事故に合ってから家族がばらばらになっているのを感じていたでもとにかく夫が作ったこの店を守らないといけないと思って一生懸命頑張ってきたけど結局は、ばらばらのままだったそんな時に一人の少年にであった

桃子・美由紀「いらっしゃいませ～」

５才位の少年が一人でやってきたそれだけでも目立つのにさらには、金髪の青目だった

美由紀がいち早く動いた

美由紀「どうしたのかな僕？一人できたの？」

？？「あっはい」

その後美由紀がその子を席に案内したあとメニューを聞いて帰ってきた

美由紀「お母さん、今の子すっごいの５才位なのに何だか年上の人と喋ってるんじゃないかな？っと思う位落ち着いてて何者何だろうね？」

確かにそんな感じがしていたこれは、もしかしたらあの子なら私の家族を元に戻してくれるんじゃないかと思った

桃子「美由紀ちょっと私あの子と喋ってくるわ」

美由紀「ん？わかったよ」

そんな希望と共に少年の元に行った

桃子「お待たせしました」

？？「あっありがとうございます」

最初こそドモッちゃってたけどたしかに落ち着いた声色だったそしてその声を聞いたあとに　核心が持てた

桃子「失礼だけど名前を聞いてもいいかしら？」

この子なら家族を元に戻してくれると

続く

4話　原作キャラに会ったよ！（サブだけど）（後書き）

桃子さんの口調ってどんなだっけ

ザマス？

ガンス？

フンガー？

レイン「まともに考えろよ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8015l/

転生します

2010年10月9日03時03分発行